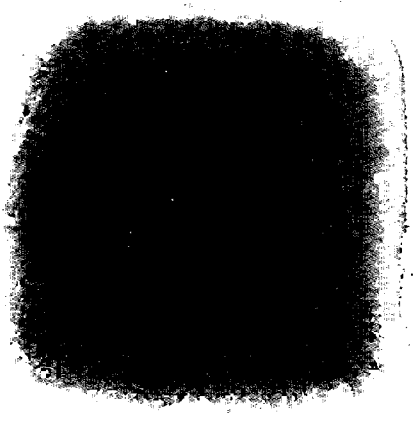
丸山薫全集 2

丸山薫全集 2



角川書店

丸山薫全集　2

1976年11月30日　初版發行

著者　丸山薫
發行者　角川春樹
印刷者　和田彰三
發行所　角川書店
東京都千代田區富士見
2の13 Tel (265)7111
振替東京 3-195208
東洋印刷・鈴木製本

0392-573102-0946(0)

目

次

青い黑板

はしがき　一

春

青い黑板　一四
字と畫　一六
唱歌　一八
ボール　二〇
山の畑で　二二
小鳥の歌　二六
燕はとんでくる　二八

夏

海の旗　三二
沖に湧く雲　三四
夏の蝶　三六
雲になつた景色　三八

さくらんぼ　四〇
北の山國にも　四三
春から夏に　四四
山ふかく　四七
白熊　五〇
雨の日　五三

秋

夕雲　五六
あちらの山こちらの山　五八
野を歩けば　六一
手　六三
働く少女　六五
山の村　六七
冬がくる　六九

冬

朝　七三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

電信柱　七四
第一ペエジ　七六
南　瓜　七八
わらぐつ　八〇
山のたより　八三
あとがき　八五

花の芯

花の芯
青春について　九〇
若者と馬と　九三
信夫日和　九六
花の芯　九九
白い鳥　一〇一
虹　一〇三
手風琴と汽車　一〇五
航海人形　一〇七
齢　一一〇
茫として　一一一
新しい時代に　一一三
詩人の友　一一五
カロッサとリルケ　一一七
ランプのやうに　一一九
言葉なき愛　一二一
母を憶ふ　一二三
さびしい宇宙
天の耳　一二八
さびしい宇宙　一三〇
山上夏日　一三三
夢に見た子供　一三四
薄倖者の死　一三六
運　命　一三八
灰　燼　一四〇
狼　群　一四二

ドッグ・ウォッチ　一四四
重い荷物　一四六
少年　一四九
うみどり　一五一

北を夢む

雪野　一五四
途上　一五六
北を夢む　一五八
北の人　一六〇
白い谷間　一六二
氷雪に行つ者　一六四
花の木　一六六
娘達　一六八
わが想ひも　一七〇
山の道で　一七二
暮靄　一七五
狐火　一七七
街では　一七九
春嵐　一八一
わらべ歌　一八三
あとがき　一八六

青春不在

第一部

緑なる實存　一九〇
怖るべき方法　一九三
祝福　一九五
火花　一九七
萌え出るもの　二〇〇
それだけのことが　二〇三
某日所感　二〇四
世界　二〇六
夜行　二〇八
香氣　二〇九

嵐の日　二一
原子香水　二一三
手とパン　二一五
壁　爐　二一八
太陽の中に　二二〇
はためくもの　二二四
勞　作　二二六
愛嬌ある妻　二二八
異　土　二二〇
湖畔で　二二二
蒼穹をわたる鳥　二二四
鶸（ひわ）　二二六
鴉　群　二二八
鷺　二二一
路地天國　二二四
煤まみれの天　二二七
カオスへ　二二一
X　二二五
樹のこえ　二二七
夜の樹々　二二九
星　二六二
めざめ　二六六
自由飛行　二六九
月と土星　二七二
遊星の中に　二七七
黑と金　二八二
虛脫圈　二八六
海は醉えり　二八七
泡　二八九
大　河　二九一
孤　獨　二九三
オリエンタル・ノイズ　二九五
女體石佛　二九七
上　海　二九九

第二部
不利の中に　三〇二
岬のたより　三〇四
ほんのすこしの言葉で　三〇六
焔　三〇八
海の瞳　三一〇
後記　三一二
連れ去られた海
海の彩色　三一五
珊瑚海　三一八
秋を航く　三二〇
リーフ幻想　三二二
連れ去られた海　三二三
海という女　三二五
幻影　三二七
若い水夫　三二九
海にいる奴　三三一
北のたより　三三三
オホーツク海　三三四
著者の言葉　三三七
月渡る
ぼくの旅
ある池畔で　三四一
鳥の言葉　三四三
心痛んで……　三四五
父島近海　三四七
海にみる夢　三四九
S船長　三五〇
岩と波　三五三
ぼくの旅　三五五
そんな眺めが……

そんな眺めが……　三六四
砂丘を歩む　三六六
千　鳥　三六八
御前崎灯台廻廊で　三七〇
海早春　三七三
水平線　三七四

海の美学

海の美学　三七八
人魚とぼく　三八〇
鮑　三八二
黄金の仔　三八五

わしら　と　ぼく

わしら　と　ぼく　三九〇
熊に遭った人　三九六
罠　三九九

ESQUISSE

月渡る　四〇二
あとがき　四〇六

蟻のいる顔

蟻のいる顔　四〇九
恥辱の形　四一一
灰色熊　四一三
ピケの殘像　四一五
祕　語　四一七
化石の中　四一九
鴨　四二一
名古屋市港區南陽町　四二三
秋の夢　四二五
蛇　四二七
流　れ　四二九
川　四三一

水　禽　四三三
「君が代」　四三五
Qホテル十階酒場　四三七
小鳥のいる部屋　四三九
あとがき　四四一

拾遺詩篇

五月の花　四四四
貧しい友　四四八
闇　四五〇
けものの仔　四五一
雪の山　四五二
父島附近　四五四
あそこはもう空ではない　四五六
鳥　四五八
樹と少女　四六〇
アモイ湾投錨　四六五
世界の舵手　四六七
南へ　四六九
水夫長の話　四七五
星空　四八一
解説　井上靖　四八五
編註　四九三
口絵写真(表)　中日新聞提供

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

青い黒板

春
青い黒板
字と畫
唱　歌
ボール
山の畑で
*山羊と花
小鳥の歌
燕はとんでくる
夏
海の旗
沖に湧く雲
夏の蝶
雲になつた景色
さくらんぼ
北の山國にも
春から夏に
山ふかく
白　熊
雨の日
秋
夕　雲
あちらの山
　こちらの山
野を歩けば
手
働く少女
山の村
冬がくる
冬
朝
電信柱
*雪がつもる
*雪の幸福
*ペングイン鳥漂流
第一ペエジ
南　瓜
わらぐつ
山のたより

はしがき

詩をむつかしくてわからないという人がいる。詩はむつかしいだろうか。詩はむつかしくない。むつかしいという人は、詩のおもしろさをかんじない人だ。

詩は理屈ではない。理屈の説明でもない。そんなものをとびこえて、いちはやく、もののほんとうの姿とこころを感じ知ることなのだ。詩が夢のようだという人は、夢のようなことに酔い、夢のようなことしか考えない人だろう。詩はゆめであるが、寝ていて見る夢ではない。いちばん正しい、すばやいこころである。賢く美しい翼のある考のはたらきである。

子供たちのこころにはアンテナがある。アンテナは塵も埃もない未來の青空にむかつて、自在に張りめぐらされている。宇宙からとんでくる眼に見えない眞理をとらえようと、ピチピチふるえて待ちかまえている。眞理がとんでくる。電波のように——。それをかんじて言いあらわす。

少年少女諸君。詩人は君たちの友だちだ。諸君も詩人である。

昭和二十三年一月

春

青い黑板

鉛筆が買えなくなつても
指で書くから　いい
ノートブックがなくても
空に書くから　いい

算數の式も　讀本の字も
圖畫も綴方の文章も
みんな　指で空に畫く

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.